紙メディアからネットメディアへ

最初に就職したのは、日本の新聞社としてトップクラスを誇る朝日新聞社だ。その在籍中にスタンフォード大学に企業留学し、多くのビジネススキルを身につけたが、帰国後に退社。いまいるのは、世界最大級のネットニュースメディアだ。

「新しいビジネスや既存の新聞社にない考え方を学ぶためにアメリカに派遣されたのですが、帰国した直後にヘッドハンティングされました。いただいた機会を朝日新聞を含めメディア業界全体に還元したいと、本気で思っています。向こうで得た知見を惜しみなくアウトプットしたい」

その本気が、語気から伝わってくる。

紙メディアからネットメディアへの転身だが、紙メディアを否定するわけではない。

「紙メディアを一回卒業してデジタルの世界にいるからこそ、紙の価値がわかります。ビジネスでは悪い意味ではなく『捨てる』という行為が大切。捨てずにどちらも大事だと考えるのと、一度捨てて両方大事だと思うのとは大きく違う。捨てたもののよさもわかったうえで、それでも残るものを突き詰めた方が、ビジネスは成功します」

グローバルなジャーナリストとして

国内外の一本一本の記事の選定に忙しいのかと思いきや、それらの多くはエディターと呼ばれる記者に任せているという。

今月の顔

会話が生まれるジャーナリズムを目指す

竹下隆一郎さん

ハフポスト日本版編集長

1979年生まれ。3歳からアメリカ・ニューメキシコ州、小学校低学年は日本で過ごし、ふたたびニューメキシコ州へ、その後コネティカット州に滞在。中2で帰国して公立校に入るが、中3から私立中学校に。2002年、慶應義塾大学法学部を卒業し、朝日新聞社に入社。経済部記者や新規事業開発を担う「メディアラボ」を経て、2014～15年ビジネス留学でスタンフォード大学客員研究員に。16年、朝日新聞社を退社し、36歳でハフポスト日本版編集長に就任。

「編集長として重視しているのは『ハフポストらしさ』というトーンのセッティングです。目指す指標の一つは『会話を生み出すメディア』。自分たちで書いた記事、写真、動画で、世の中の会話の量を増やしたい。一本一本の記事は完全にエディターを信頼して任せ、目指すスタイルとビジョンを共有することに気を遣っています」

紙メディアのときも、ネットメディアのいまも、立ち位置はリベラルだ。

「リベラルのスタンスの一つは権力に対する緊張関係ですが、権力は時の政権だけではありません。たとえば企業、いまなら私たちの情報をコントロールしているGAFAも厳しく見ていきたい。もう一つ、この社会をデザインし直そうというポジティブな動きに注目し、SDGsをベースに企業の新しいあり方を議論していきたいと思います」

日米両方の小・中学校を経験している。日本の教育について聞いてみた。

「日本ではパブリックスピーキングの授業がすごく少ない。アメリカでは幼稚園でも、自分が好きなものを持っていってみんなの前で発表する“Show & Tell”がありました。私は日本人なら誰でも知っているのにアメリカではなじみがないように感じたポッキーを持っていき、プレゼンしました。バックグラウンドが違う人に話すのは、すごく貴重な経験です。日本にも発表の授業はありますが、パブリックという、誰が参加しているのかわからない場で話す技術が足りていません。日常的なことば一つとっても、相手が何を前提としているのかを考えないと、これからの国際社会では生き残れないのでは」

母親がつくってくれたケーキを前に

現地校の友人たちと

いま、多様な国の人がオンライン会議に参加する職場環境にあって、多様なバックグラウンドの人にことばを伝える術（すべ）を持っていることは大きな武器になっている。

世界観を二つ以上持ったらいい

メディアリテラシーについて、外国で暮らしている人へのアドバイスを求めた。

「大切なのは、たんに文章を読み解けるというだけではなくて、世界観をどれだけ多く持っているかだと思います。日本人の世界観、アメリカ人の世界観がある。アメリカ人でも住んでいる地域で違う。それをわかっていないと、どれだけ断片的なニュースを見ても本質は理解できないと思います。いま海外に住んでいる人は、そこの世界観にどっぷりつかって、それを大事にしてほしい。日本の世界観と、いまいる場所の世界観。少なくとも二つ持っていれば、ニュースに対する理解は何倍も深まり、リテラシーは格段に上がると思います。それは将来、絶対にプラスになるはずです」

アメリカの幼稚園に通っていたとき、「なんで自分だけ髪の色が違うの？」「顔の形が違うの？」と言って泣いていたと、亡き母から聞いた。いつのまにか複数の世界観を身につけ、それを武器にジャーナリズムの世界で生きている。

（取材・文＝飯田 みか）

発行：海外子女教育振興財団　改変ならびに再販を禁じます。